

第二編

明

治

初

頭

第一章 明治初頭のパンの背景

第一節 明治初頭のパンの概見

近代日本のパンの発足は江川太郎左衛門が手がけた兵糧パンをもつて嚆矢とする。そしてこのパン食ブームは安政六年（一八五九）の横浜、長崎、箱館の開港によつてやや軌道にのつてきた感があつた。しかしながらそれから明治維新までの八年間は開国派と攘夷派、幕府と討幕派のはげしい対立抗争のために、食生活洋風化の象徴ともいふべきパンは踏んだり蹴つたりのみじめな状態に置かれた。

それが明治維新の外国との和親の詔勅公布によつて一段落となり、再出発の第一歩をふみだすことになつたが、明治のシンボルともいふべき文明開化風潮がおこつたのは明治四年（一八七一）であつた。その文明開化風潮の波にのつて政府がパン食普及の一大障礙であつた肉食の禁を解いたのは明治五年（一八七二）であり、パン食普及の一大推進力であつたキリスト教の禁を解いたのは翌明治六年（一八七三）であつた。

こうしてはじめてパン食普及の障礙は取り除かれたが、それでもパン食様式はかけごえだけで容易に一般人民の中までは浸透していかなかつた。このような普及上の障碍を打破しパン食の全国的普及に大きく役立つたのは木村屋總本店の開祖木村安兵衛が工夫した日本独特の酒だね生地製のアンパンであつた。このアンパンが銀座名物の一つにかぞえられるようになつたのは、銀座の洋風街が完成した明治十一年（一八七八）ごろからであつたが、やがて欧風潮が最高潮に達した鹿鳴館時代になる。

この時代になるとパンやケーキや西洋料理がそうした世相の影響をうけて脚光を浴びてきたが、それでもまだ食パンは珍奇食の域を出なかつた。その食パンが米飯の代替食としてやや頭角を現したのは明治二十三年（一八九〇）の凶作による米価の暴騰がそのキッカケであつた。

そこで本篇では王政復古の慶應三年（一八六七）から明治二十三年（一八九〇）までのパンの歩みをとりあげることにした。

つぎにパン食の普及拠点に目をうつすと、安政条約によつて開港された神奈川（横浜）、長崎、箱館のうち、横浜がその中極的役割を演じたことは既に言及すみであるが、王成復古の年に兵庫（神戸）があらたに開港され、明治元年（一八六八）にはさらに新潟が開港され、これと相前後して江戸（東京）と大阪の開港が断行された。これがために明治期に入るとこの五港と東京がパン食普及の拠点としての役割を果すことになつた。そしてそのうちの兵庫改め神戸は西日本の大玄関として東日本の横浜と肩をならべる一大拠点となつたのである。

また東京の木村屋總本店が日本独特のアンパンの元祖として、菓子パン類の開祖として成長するに至つたので、この銀座の一角からそれまでに無かつた菓子パンが全国的拡がりをみせるに至つた。

つぎにパンの種類の変遷をみると、幕末に勢威を誇つたフランスパンが明治期に入ると次第にイギリス流の型焼パンにかわつていつた。そしてその製法もホップスだね法に移行していくのである。

明治初期の食パンの需要の大部分は、在留外国人や開港場に出入りする外國船の需要であつた。それは横浜や神戸の初期のベーカリー経営者が外国人であつたことからも察するに難くないが、それを次第に日本人社会に浸透せしめるのに貢献したのは耶蘇教の教会やミッションスクールであり、外人相手のホテルであり、英・仏に指導された陸海軍であり、洋行帰りであつた。

だが、維新当時の官庁がお雇い外国人の指導と助言の下に積極的にパン食文化の普及につとめたことも忘れられてはならない。

しかし、ここでさらにもうすこし巨視的な立場に立つて往年にふりかえつてみると、何といつてもパン食普及ムードの盛り上りに一ぱん大きく作用したのは明治の御一新がもたらした旧弊一洗のムードであり、文明開化の欧風潮であつた。福沢諭吉は明治維新をさしてそれは改進というより

も始造といった方がより適切であつたと喝破しているが、まさにその通りであつたのだろう。

そうでなければもつとも保守的な食生活が伝統のある粒食から粉食へと容易にかわるはずがないからである。しかし食生活は直接台所に結びついている。従つていかに粉食ムードがもりあがつても国民の日常生活が向上しなければ、その普及はあり得なかつたにちがいない。そういう点からいつて明治維新を契機として日本の資本主義経済が、多くの問題をはらみながらも成長の一途をたどつたということは、パン食普及を可能ならしめた基本条件であったというべきであろう。

このように問題を掘り下げていくと、明治のパン食史は即ち日本の近代化史でもあるといふことになるが、そこまで範囲を拡げていくと際限がないので、なるべく問題を整理して、以下明治初頭のパンのあゆみに言及する。

第二節 文明開化の世相

前節で言及した通り日本のパンは明治二十三年の米騒動を契機として珍奇食時代に終止符を打つた。従つて本篇は明治維新から明治二十二年（一八八九）までの記録となるが、明治維新を区切りとし日本のパンが新しい段階に移行したのは、維新によつて政治経済社会状勢が一変し、それが衣食住の洋風化を促す原動力となつたからであつた。

そこで順序としてパン食の普及に拍車をかけたその背景から言及するがまづこの二十余年間の流行語を拾つてみよう。それはよかれあしかれその時々の人心の動向を浮き彫りにしたものだからである。

明治初頭の流行語略年譜

西暦	年号	事項
一八六八	明治元年	御一新、錦切れ（きんぎれ）被仰出（おおせいださ

一八六九	一八七〇	一八七一	一八七二	一八七三	一八七四	一八七五	一八七六	一八七七	一八七八	一八七八	一八七九	一八八〇	一八八一	一八八二	一八八三	一八八四	一八八五	一八八六	一八八七	一八八八	一八八九	
テレグラフ（電信のこと）	飛脚船（郵便蒸氣船）	巡査（らそつー巡査）	書状集箱（ボスト）	ボリス（巡査）	文明開化七つ道具（新聞紙、電話、郵便、ガス灯、蒸氣船、岡蒸氣、写真絵）	血税（徵兵のこと）	富国強兵、有司專制、天賦人權	者（どじょう）	鮑（なます）	鰐（なます）	竹槍（たけ槍）	日那（ひな）	密偵（みつてい）	民權熱（みんけんねつ）	国会熱（こっかいねつ）	袂時計（めいじけい）	自由（じゆゆう）	压制（じせき）	バア（圓太郎馬車）	板垣死す（いたがきしす）	とも自由（ともじゆゆう）	死せず（しせず）
巡査	富國強兵（ふくにょうへい）	有司專制（ゆうしせんち）	天賦人權（てんぶじんせん）	鮑（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）		
者（どじょう）	鮑（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）		
者（どじょう）	鮑（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）	鰐（なます）		

以上が治明初頭の流行語のあらましであるが、当時の世相が適切に表現されているといふことができよう。

これでみると「文明開化」が流行語として登場したのは明治五年であるが、七年になると早くも有司專制（ゆうしせんせい）つまり薩・長藩閥の横暴がとりあげられ、これにたいして自由民權即ち天賦人權説がはやつてゐる。これは福沢諭吉の「天は人の上に人を造らず」説が普及した為でもあるが、封建時代には夢にも考えられないことであった。

明治十三年から十五年にかけて自由民權運動が高潮に達したが、それは「自由」とか「民權」とか「密偵」等の流行語に反映している。また欧化風潮が頂点に達した時代を鹿鳴館時代といふが、この外務省經營の外賓接待所が竣工したのは明治十六年であつた。鹿鳴館時代はそれから明治二十二年十月二十五日の黒田内閣辞任までつづいたが、鹿鳴館竣工の翌年にあたる十七年の流行語は「改良」となつてゐる。これは万事を西洋風に改良することなくして安政屈辱条約の撤廃はあり得ないとの風潮を反映したことばかりで、その中には勿論衣食住の洋風化も含まれていた。極端なところでは西洋人のタネを入れて人種を改良すべしとの説や漢字を排してローマ字にすべしとの説まであつた。

十九年の流行語はワルツ、二十年の流行語は鹿鳴館となつてゐるが、その二つのことばには西洋舞踏、婦人の洋装洋髪、洋靴、衣食住全般の洋風化、日本国を挙げての洋風化が秘められていたこというまでもない。

明治二十一年から二年にかけては帝国憲法に関連した流行語が幅をきかせてゐるが、その憲法もドイツからの輸入ものであり、欧化風潮に背致するものではなかつた。

この欧化風潮が国粹風潮にかわつたのは、屈辱条約の改訂交渉が思うようないかず、大隈外相が右翼のテロで重傷を負い、その結果黒田内閣が辞职し、第一次山県内閣が出現した二十二年十二月以後のことであるが、そうちした國粹時代になつても日常生活洋風化の風潮に変化はなかつた。

明治維新を機としてパン食が上げ潮にのつたのは、こうした世相に負う

ところがあつたのである。

第三節 明治御一新の性格

このような欧化風潮の火元が維新政府が推進した、いわゆる明治の一新旧弊一洗であつたことはいうまでもない。そこでその改革の指標とみられる主なる事項をここに列挙するとあらまし以下の通りである。

明治御一新略年譜

西暦	年号	事項
一八六八	明治元年	諸外国に王制復古の通告
一八六九		五か条誓文及國威宣揚の宸翰發布
一八七〇	明治二	神仏分離令の公布
一八七一	明治三	版籍奉還の許可
一八七二	明治四	平民に姓（氏）呼称許可
一八七三	明治五	洋式陸海軍制の採用
	明治六	廢藩置縣
		散髪廢刀許可
		穢多・非人の称廢止
		宗門人別帖の廢止
		職業の自由公認
		學制頒布
		太陽曆採用
		國民皆兵の告諭
		僧侶の肉食妻帯蓄髮許可
		仇討禁止
		耶蘇教禁制の高札撤去

一八七五	明治八	地租改正条例の公布
一八七六	明治九	立憲政体漸立の詔
一八七九	明治一二	官吏の洋服着用、日曜休日、土曜半ドン制 廢刀令公布
一八八〇	明治一三	梶首刑廃止
一八八二	明治一五	国会開設の詔書
一八八五	明治一八	日本銀行条例公布
一八八八	明治二一	内閣制度実施
一八八九	明治二三	枢密院設置 帝国憲法公布

以上が明治御一新の骨格であるが、これを一言にしてつくせば、これは封建制から近代国家への移行の地均しに外ならない。そしてこれでみると明治十年（一八七七）の西南戦役以前におおむね改革の基礎固めが終り、それ以後の十年間は憲法の制定と議会制度の確立に焦点がうつっている。並べてみればたつたこれだけのことであるが、しかしこれがたいへんな旧弊一洗であったことはいうまでもない。現にこの明治維新文明開化への推進力となつた福沢諭吉は、その明治八年（一八七五）刊の「文明論の概略」で、この点に次の通り言及している。

「わが人民においてその事のあらたにしてめづらしきは勿論、事々物々（じじぶつぶつ）見るとして奇ならざるはなし。聞くとして怪ならざるはない。之をたとえば極熱の火を以て極寒の氷に接するが如く、人の精神に波乱を生ずるのみならず、その内部の底に徹して転覆回旋の大騒乱を起さざるを得ざるなり。この人心騒乱の事跡に現われたものは、前年の王制一新なり。次いで廃藩置県なり。以て今日に及びしことなれども、これらの諸件をもつて止むべきにあらず（略）けだしこの騒乱は全国の人民文明に進まんとするの奮發なり。わが文明に満足せずして西洋の文明をとらん

とするの熱心なり。故にその期するところは到底わが文明をして西洋の文明の如くならしめて、これと並立するか或いはその右に出るに至らざれば止むことなかる可し。（略）人心の騒乱かくの如し。世の事物の紛擾雜駁（ふんじょうざつぱく）なること殆ど想像す可らざるに近し。（略）今のが文明は所謂火より水に変じ、無より有に移らんとするものにて、卒突の変化、啻（ただ）にこれを改進（かいしん）という可からず。或いは始造（しそう）と称するも亦不可なきが如し」と。

以上の通りで福沢ですらこの明治維新は「改進」でなくて「始造」であつたといつてゐるのだから、その変化が廣汎にして多岐に亘つたものであつたことがわかる。

第四節 パン食普及と廢仏毀釈

当然のことながらこの明治御一新は国民の日常生活全般に亘つて大きな変革をもたらした。それは和服から洋服へ、和食から洋食へ、藁屋根から洋館への変化であったということもできよう。

しかし「衣」「住」の場合はともかくとして「食」の改進乃至始造には根本的な障礙があつた。それは日本人のすべてが「宗門人別帖制度」によつて服属を強いられている仏教のおきてに「不殺生戒」即ち生きものを殺さずたべないというおきてが敵として存在していたからであつた。

このおきてが存在する限り、食生活の洋風化是不可能である。現に幕府は開港後異人から申入れのあつた肉牛を提供せよ、牛乳を提供せよとの要求に対し措置を実施した。イギリス人の箱館における要求にたいしては薬用の名で提供を約し、下田のハリスの要求にたいしては、ホンコンから山羊を輸入することを黙認するということで当面糊塗した。

しかし維新政府が諸外国との親善にふみきり、西洋文化の全面的な導入を決意した以上多くの外人がこの國にのりこんでくる。それらの外人はパンを常食としており、そのパンには肉乳卵と動物油脂が不可分のものである。だからこれまでのような兒戯に類する措置ではすまされないし、外人

(一八六八) と接触の多くなる日本人が外人と食卓を共にしないわけにもいかないだらうからもある。かといって、肉食をゆるすことは仏教一辺倒の伝統を破壊し去ることである。そしてそれは同時に肉食を可とするヤソ教の侵入をゆるし、仏教の衰微に拍車をかけることでもある。

このようにこの「食」の問題は非常に厄介な問題であつた。では維新政府はこの厄介な問題をどのように処理したかということになるが、結果からいうと次のような方法でこの食生活洋風化の障礙除去に成功している。一、仏教を国教の地位から引き下して宗門人別帖制度を破棄し、これに代るものとして神道を国教とする。

二、仏教の渡来以前からこの国に存在していた神は肉食を否定しないない。従つてその神の名で肉食の禁をとく。
三、天皇は天照大御神の末裔であらせられるから現人神（あらひとかみ）である。従つて現人神たる天皇の名で僧侶を含む全人民に肉食解禁を告げる。

四、同時に天皇自らパンと肉乳卵を摂り、これによつて肉食禁忌の旧弊を一洗する。

五、神道を国教とする以上、その他の如何なる宗教も国教ではない。従つてその信仰と否とは国民各個の自由である。

六、この場合むろんキリスト教信仰だけを禁ずる理由はないから、適当な機會をみてヤソ教禁制の高札を撤去する。

以上が維新政権がとつた食生活面における旧弊一洗のための筋書であったが、これは「王政復古」の理念にも反するものではなかつた。ではどのようにしてこの筋書が実施されたかについて歴史の足あとをふりかえつてみると、あらまし以下の通りである。

神仏分離の措置に関する年譜

年次別	事項
明治元年	一月十七日太政官に神祇科をおく

(一八七〇) 二月三日太政官神祇科を神祇事務局と改める

三月十三日祭政一致、神祇官復興の布告

三月十七日社僧別當は復飾還俗せしめらる

三月二八日神仏判然令公布

四月二一日神祇事務局を神祇官とす

五月九日勅祭社府藩県社の別を定める

六月三日神仏判然の処分は廢仏毀釈に非らざる旨を布告

十月一七日祭政一致の途復興につき氷川神社御親祭

六月二九日東京招魂社創建

七月八日神祇官を太政官の外におく

九月一五日諸陵寮設置

九月二九日宣教使をおき太政官に属せしむ

十月九日宣教使を神祇官に属せしむ

十一月三日鎮祭の詔及び大教宣布の詔下る

七月四日大教の要旨宣布

一月五日社寺領を收公

三月一日神武天皇を神祇官に祭り、遼持式を行わしめる

四月四日宗門人別寺請制度廃止

五月一四日神社の社格を制定

五月宮中安置の仏像、仏具を泉涌寺に移し、葬礼を神祇祭祀の形式に改める

一月二四日明治天皇膳宰に勅して初めて肉膳を召し給う

二月二八日僧位僧官等永宣旨廢止

四月二五日僧侶の肉食妻帯蓄髪を許す

このように神仏分離政策は、神道国教化の方向めざしてすすめられたが

明治元年三月十三日の祭政一致神祇官再興の布告をみると、「ヨノ度王政復古神武創業ノ始ニ被シ為シ基、諸事御一新、祭政一致ノ御制度ニ御回復被レ遊候」云々とあるし、また同月十七日付の「社僧禁止の達し」をみると「今般王政復古、旧弊御一洗被レ為ニ在付、諸国大小ノ神社ニ於テ、僧形ニテ別当或ハ社僧ナドト相唱ニ候輩ハ、復飾被ニ仰出ニ候（略）但し別當社僧ノ輩復飾ノ上ハ、是迄ノ僧位僧官返上勿論ニ候」とある。

このようにきびしい排仏措置をみた民衆の間から起つたものは、例の廃仏毀釈運動であつた。そしてこの運動は維新初期の旧弊一洗旧物破壊の一一般的風潮に影響されて、文学通り寺院、仏教、仏具、經巻（けようかん）の破毀または焼却運動として展開されたのであるが、朝廷もこの線に沿つて仏像を宮中から追放すると共に、明治五年正月二十四日には、仏教の殺生戒を破つて肉膳を天皇に供するということを断行した。そして同年四月二十五日には僧侶の肉食を許すという殺生戒否定の措置が講ぜられたのである。

これが幕府施政の下部組織であつた寺院を弱体化し、その権威を失わしめる措置であつたことはいうまでもないが、同時にこれによつて、肉乳卵と結びついたパン食を普及するという一石二鳥のねらいもあつたのである。この点は「切支丹宗門之儀是迄御禁制之通固相守事」または「邪宗門之儀は固く禁止之事」と大書した高札が明治六年（一八七三）二月を期して一斉に撤去されたことからも察するに難くない。

第五節 食生活洋風化の啓蒙

以上のようなきづを経て食生活洋風化の障礙は一応除去されたが、この精神を一般人民に浸透するためには啓蒙措置が必要であつた。そこで明治六年（一八七三）から多くの啓蒙書が出版されたが、その中の横河秋壽著「開化の入口」（明六刊）と加藤祐一著「文明開化」（明六刊）の論

旨を紹介すると以下の通りである。

横河秋壽著　開化の入口（抄）東京—明治六年刊行

これは渥川頑太郎という頑迷な旧弊人と西海英吉という文明開化人との問答というかたちで、文明開化の合理性を説いた啓蒙書であるが、ここに抽出したのは肉食とパン食の合理性を説いた部分である。これをみると、日本人が崇敬措かない孟子（もんじ）が肉食しているし、また日本でも仏法渡来以前は肉食をしたのだから、肉食するものは畜生などなどというのは、とんでもない認識不足であること、またパンと肉を常食としている西洋人の体格は、日本人と格段の相違があることなどを懇切丁寧に説いている。

開化の入口（食物問答の項抄）

頑——ハテさてお主は何につけてもよう理窟を云う人ぢや。その畜生だという証拠には、第一我々の食物と彼奴等（きやつら）の食物とはさつぱり訳がちがうて居る。仮初（かりそめ）にも牛や豚を食物にして、小麦の粉や草の絞り汁に血をませたようなものを呑んで生きて居るものと、ミヅホの國のお米の精で生きている人間と、同様の相庭（そうば）は逆（とて）も立てられぬぢやないかノンシ。それにそのまねをよいことにして、お上さまから相庭を崩しかけた者じやケイ、勿体（もつたい）ない、八百万（やおよろず）の神々様やご先祖さまのお立てなされた法式をそろそろ崩して不淨無類のエタ共を平民になされ、あまつさえ我々と同様に苗字（めようじ）を許すなどとは、扱もさてもたまげた世の中となり果てたものじやノンシ。

英——サア私共が云うことも理窟とばかりお聞きなさるから、一向道理が別らない。西洋人が肉食するからそれで畜生同様ぢやと思つてござるがそれは日本人が食物の訳あることを知らないからさ。お前、論語や孟子はお読みなさらぬか。〔略〕又孟子も五穀之宅種桑の説、馬、牛、羊、鷄犬、豚をかわなくては一家の世帯がいけないと深切にといつられるではありませんか。そのうち牛は天性（てんせい）清淨なもので、食物の最上だ。犁牛之子（すきうしのこ）がヒョツト赤くてなめ牛で有つたならば、

皆山や川の神さまへ供えなくてはなるまい。辻（とて）も人の口にははいるまいと孔子さまも舌なめずりして云つてござる。是が食物の最上という証拠でござる。そこで聖人の作られた礼記には、大廟を祭るに必ず犠牲（ぎせい）や大牢と云うて、牛肉を供へることだとある。

皇國も上古（じょうこ）は隨分獸肉を人もくつたり神さまへも供えたとみえて、奈良の春日さまのお祭りに百味の御食（おんじき）といつて、獸肉を献じることがのこつていますよ。次に西洋人が肉食を第一とする訛柄をかいつまんでも話しましょか。凡そ人の食物のうち第一からだの養いになるべき正味が四種ある。一に「フロンティイ子」質といつて、肉の中に含んでいる鶏卵の白味のよくな物、之が一番大切な物で、二に粉質、三に海上、四に油質ということだ。それだから西洋人は悉く右の「フロンティイ子」を含んでいる肉類と小麦で捲えた蒸餅パンを一度に何拾枚と分量をきめて、その間には養生の為になる葡萄酒や「シヤンパン」を呑む事だ。下賤な者でも麦で造つたビィールを含んで、皇國や支那のように血を狂わして養生のためにならない、酒や焼酒（しようちゅう）は薬用の外済して呑まない。その証拠には彼等がたれた大便を見なサイ。正味六分は身につくとみえて、よくこなれて小分な物だ。日本の田舎人が麦の粉の団子や蕎麦のかひ餅を椀に盛り上げ、やたら取込んで腹をふくらした処が、正味身につく養分は一分か二分かサ。つまり脾腹（ひばら）を傷めるだけが差引の損で、左ねじりの左大便を高く盛り上げて、掃除やが悦ぶだけの談（はなし）しさ。これはお互に今日人間の一番大切な養生のために屹度（きつと）利益のあることだからよく心を留めてお聞きなサイ。

チト横浜や神戸へ出て西洋人と日本人とが立並んでいるところをよくよくみなさい。彼奴等（きやつら）は四十以上の老人でも何となく色沢（いろつや）もよく、元気がよくて腰のかがんでいるものを頓（とん）と見なイ。日本人は何となく顔色が憔悴（しようすい）して、大体四十前後からイヤ俺は腹が筋張るの、疝氣（せんき）がつづばると口舌ができる、疚

積留飲腹（せんしやくりういんぱら）は板の如く背にひつついて往年腰になるのが沢山なことだ。西洋の医者はこれを「ジャパン・シイキ」（日本病）と名付けて、あの大阪病院の教師ボードイン先生も、これは全く日本人が肉食をしない故の旧弊じやというたそうナ。さてまたこの次に此のエタを平民にお取立遊ばさるご仁心（じんしん）を彼是と論ずる馬鹿者が多あります、全体お前さまは我子をかあいいものと思し召すか。憎いものと思し召しますか、まづその辺から承りましよう。（略）」

左記は同じく明治六年（一八七三）に大阪で出版された加藤祐一著の「文明開化」であるが、これは啓蒙宣伝の種本として広く利用された。次は著述の中の肉食礼讚の個所であるが、新政府の祭政一致政策の線に沿つて、神道では仏法のような殺生戒などを問題にしない所以を説いていたところが印象的である。

「文明開化」——食物の部抄

元来、獸肉、魚肉都（すべて）て肉類を忌むは仏法から移つたことで、我が神の道には其様な事はない。その証拠は神代の巻にも山幸（さち）海幸（うみゆき）ということがあつて……即ち皮を剥いで衣服にもし、肉を切つて食用にもするのぢや。その他神に獸の頭や魚の肉を捧ぐるのは常のことで、獸食を喰うて穢（けが）れるというような事は決してないことぢや。けがれといふことは糞汁腐敗物其他何によらず臭氣などがあつて、手に触るのは勿論見るも心わるく、誰も嫌うものに触るのがけがれで、好んで喰う程のものにけがれといふことはない道理ぢや。尤も血けがれということがあつてもよさそうなもので、それ故獸（けだもの）を屠（ほうち）りなどするをけがれというたるものぢやが、その血を洗い淨めてさえしまえば、即ち清浄なものぢや。その清浄になつたものを、やはりけがれというなら、糞汁をかけた菜、大根も何ほど洗うてもやはりけがれといわねばならぬ道理ぢや。……さてけがれの論はその通りぢやが、元來有情（うじよう）のものを殺すは快よからぬ事で、それ故仏者は肉食を戒めたものぢや。先祖

祭に獸食を備うる漢土（から）でさえ、庖厨（ほうちゅう）を遠ざけ、或いは穀類として死地に就くを傷む。それが即ち人情というもので仁の端ぢや。屠殺（とさつ）を何でもないよう思うては、人が慘惡（さんあく）になるであろうと思うて、仏者はこれを厳しく戒めたものぢや。さりながら大小を制するは有情（うじょう）のもの一般の習いで、鼠は猫にとられ、猫は犬に制せらる。万物の長たる人ちやもの、何喰うたとて遠慮はない。もとより鳥魚を喰う程ならば、牛豚の肉も同じことで、形の大小を以て差別のあることなら、魚でも鯨は喰われぬ道理。但し魚は死に臨んでも声を発せぬもの故さほどにも思はず、鳥獸は悲しい声を発し、その死を憂うる体の容子にも見ゆる故、人情、愛憐のかかることわりで、そこに差別はある事なれど、けがれるがれぬという差別が獸と魚とにあるわけはない。その道理を説くのぢやに依つて、その理をよく会得して、あまり俗なことをいうて、人に笑われぬように心掛けるがよろしいことで御座る。」

どうも鯨を魚といつてゐるところなど一寸奇妙なようと思えるが、当時はみんなそう思いこんでいたのだろう。何れにしても加藤はこうして万物の靈長たる人間は、何をたべても差し支えないことを説くと共に、文明開化に対する態度については次の通り言及している。

「この文明開化ということを、この節は口癖（くちぐせ）のように世間の人が申しますが、さて文明開化のわけがわかつていう人は少いようだ。それは何故ぢやといふたら、よく世間の人のいうことをきくに、豚をくうたといふては文明ぢや、あいつはこのごろ蝙蝠傘（こうもりがさ）をさしてあるきおる。えらい文明ぢや、沓（くつ）はいたままで座敷へ上りおつた、こりやちと迷惑な文明ぢや、おまけにつれて米も上りおつた。お札で鼻をかみおつた、仮壇を毀ちおつた、えらい文明ぢやと西洋人の真似（まね）をするが、耳に新しいこと、眼に新しいこと、人に異つたことさえすれば、何でもかでも文明開化にしてしまうがそういうものでもない。

元來の趣意を知らないで、めつたむしように耳目に新しいことするばか

りを、文明開化ぢやと思うてはとんだまちがいができる。文明というは文字で考えてみるとがよい、文に明かということで広くまんんで世界のことを知り究め、そのよいところをとつてわが身の心得また行ないとするを、眞の文明といふべきことでござる。しかしそれは容易に出来にくいことじや故、そこまでには至らずとも、その心掛で少しづつすんで行く人が、即ち文明の人ぢや。只形ばかりを西洋人に似せたり、または意表なことをするのを文明とは申されぬ。左様な人をたとえて申ばば、土でつくねた船を彩色したようなもので、実地の用にはとんと立つまい。二三年まえに流行したうたに「さんぎり天蓋（てんがい）を叩いてみたら文明開化の音がする」とあつたが、あれは云い得て妙なうたで、いかさま音ばかりのようなものぢや。丁度蒲燒屋のまえを通つて匂いばかりをかぐようなもので、腹にはたまらぬ。しかし音ばかりでもするがよい。その中には天蓋に恥ぢて少しづつは見聞も広くなろうでござる。」

これでみると、わけもわからぬまま文明開化を口にしている手合ひが多いが、それでもそういつてゐるうちに次第にその意味がわかつてくるだらうから、云わないより云つた方がましだというのである。まことにご時勢を達観した見方であるが、ここに出てくる「ジャンギリ頭を叩いてみれば」云々の俗謡の全文は次の通りで、明治五年（一八七二）五月刊の「新聞雑誌」に出てゐる。

半髪頭（はんぱつあたま）を叩いてみれば、因循姑息（いんじゆんこそく）の音がする。縫髪頭（そうはつあたま）を叩いてみれば、王政復古の音がする。ジャンギリ頭を叩いてみれば、文明開化の音がする。

以上が当時流行の俚俗のはやりうたの全文であるが、明治六年（一八七三）になるとこんどは次のような「大津繪節」がはやつた。
おいおいに開けゆく、開化のみ世のおさまり、郵便はがきで事実足りる
針金だよりや陸（おか）蒸氣、つつぼに沓（くつ）をはき、乗合馬車に人
力車、はやるは安どまり、西洋床に玉つき場、温泉場、日の丸フラホや牛
肉、日曜どんたく、煉瓦（れんが）造りの石の橋

何れも文明開化讃嘆であることに変りはないが、はやりもの一つに早くも牛肉が登場していることは、食生活の洋風化が短期間に文明開化ムードにのつてしまつたことを示すものである。

このような鎖国攘夷から文明開化への移り變りが如何にめざましいものであつたかについて、福沢諭吉は当時を回想して次の通り語つてゐる。

「私の身の進退は前に申す通り、維新の際は幕府の門閥制度、鎖国主義が腹の底から嫌いだから佐幕の気がない。さればとて勤王家の挙動をみれば、幕府にくらべてお釣の出るほどの鎖国攘夷、もとよりこんな連中に加勢しようなど思いも寄らず、ただジツと中立独立と説をきめていると、今度の新政府は開國に豹変した様子で、立派な命令は出たけれども、開国の名義中鎮撫タツブリ、何が何やら少しも信するに足らず、東西南北何れをみても、共に語るべき人は一人もなし。ただ一人で身に叶うだけのことをつとめて開國一偏、西洋文明一点張りでリキンでいるうちに、政府の開國論が次第次第に真成（ほんもの）のものになつてきて一切万事改進ならざるはなし、所謂文明駿々乎（しんしんこ）として進歩する世の中になつたこそ実にありがたい仕合せで、いわば私の大願も成就したようなものだから、もはや一点の不平は云われないと。

これでみると、一たん文明開化の味をおぼえた民衆が、中腰の政府をひきずつていつたといふのが真相ということにならう。

第六節 食生活洋風化の新風

こうした時勢の変化は次第に日常生活の中に浸透していく。明治七年（一八七四）刊行の荻原乙彦著「東京開化、繁昌誌初篇」をみると、彼は当時の東京の洋風化について次の通り言及している。

「勅任奏任官の第一たる、もとこれ大名の邸、或いは麾下の舎なり。今や修飾を加え、或いは層樓を起し、イギリスに倣（なら）いフランスに模す。その屋舍巍峨傑然（きがけつぜん）として空に聳え天を刺す。出づるには駄馬車（しばや）に駕し、嬖妻は左にし寵妾を右にす。侍婢數輩（じ

ひすうはい）左陪右侍、家従は前に在つて御（ぎよ）を司り、意氣自ら揚々たり。入れば即ち好椅子、美食、じゅうたんを粧（よそお）い、瓶花四時を一にし、照丸彩光を射る。玻黎（ハリ）の障子夏冬にして、ストーブの温冬暖なり、器具新奇を蒐（あつ）め、衣裳鮮麗を費し、その食を牛羊にして、その言を英仏にし、その鬚を長うし、その性を白皙にせんと欲す。知らず開化の時能く化するや歎や」と。いさかか白髮三千丈式のきらいはあるが、これは西洋パン食文化が、まづ新政府の高官によつてその日常生活にとりいれられたことを示すものと解すべきであろう。

しかし食生活洋風化の尖端を切つたものは、当時続出した西洋料理店であつた。明治七年（一八七四）刊の服部誠一著「東京繁昌記」は、当時の西洋料理店の模様に次の通り言及している。

「歐州の珍味を齎（もたら）し、米国の煮肴をひさぐ。牛の肉や豚の肉や素麵麺（すばん）（当時は食パンを菓子パンと区別する為にこう呼んだ）や（かすてら）や、葡萄酒と曰（い）ひ、何と曰ひ、何と曰ふ。屠戶肉店、菓舗酒肆を併せて羅列し、山手に下坊に、処として洋食を売らざるはなく、人として洋酒を嘗（な）めざるはなし。蕃客固と喰ひ官的最も喫ひ、華士族喰ひ、農工商喰ひ、尊姐喰ひ、貴女喰ひ、絃妓娼婦亦喫ふ。これ西洋料理の大いに繁昌する所以なり。その調和業半（じやつぱん）（日本）と曰ひ、菓に（パットケイキ）と曰ひ、汁に蘇伯（ソップ）と曰ひ、羹に羅斯比斯（マースピス）と曰ひ、油烈（テンプラに細底幼（シチュー））と曰ひ、牛肉に比斯鉄（ビーステキ）と曰ひ、菜撒拉爾（サラダ）と曰ひ、これその大略なり。三食も亦唱を異にする。晨食を伯勒哥斯（フレツクバー）ス）と曰ひ、午飯に朱法以（チュフエン）と曰ひ晩餐に撒巴爾（サツバー）ル）と曰ひ、また饗宴に或尼爾（ジュンネ）と曰ひ、価各三等あり。概ね五十錢より三円以上五百に至る。樓亭は大抵洋築に擬（ぎ）し、而して柱壁必ず油脂（べんき）を塗り、或いは白、或いは青、器具皆舶品を用ひ、而して筵席渾て氈装を敷き、或いは紅或は紫。物皆美麗を飾り、実必ず清

潔を極む。最も名あるものを精養軒と曰ひ、万国亭といひ（尾張坊にあり）三河亭と曰い（神田三河坊にあり）万林樓と曰ふ（日本橋品川坊に在り）その中業半（ジャッパン）日本料理にして西洋を兼ねるものあり、万林の如きこれなり」と。

この著者はさらに語を継いで、有名な精養軒へ出入りする高級客に次の通り言及している。

「凡そここに来るものは、皆世界を併呑するの大才子にして、固（も）とわが酒食をもつて蛮物となし敢てこれを喰はず。腹全く洋脇を蓄へ（それ然り、豈ぞれ然らん乎）頭既に洋脳を貯へ、衣服飲食より言語應待に至るまで一も洋ならざるなし。故に自らその風致を異にする。那破裂音（ナボレオン）ひげを撫（ひね）つて喋々（ちようちよう）として、君主擅制の非を談ずるものは民権家なり。彼得爾（ペートル）（魯國古勇士）眼をいからして、呶々として立君独裁の利を話すものは压制家なり。密爾（ミル）氏の偽舌を越して論ずるものは經濟家なり。弗蘭格林（フランクリン）の余地を嘗めて説くものは窮理家なり」（下略）と。

いささか大袈裟（おおげさ）のそりを免れない書きぶりであるが、当時の西洋料理店の大部分は支那人を料理人として雇つていたから、この中には支那料理に属するものもあつたのだろうが、何れにしても欧化風潮が次第に盛り上りをみせるに至つたことはこの一文でもつて察するに難くない。

第七節 パン食ブームの走り

食生活洋風化に関する啓蒙書のはしりは、慶応元年（一八六五）七月刊の福沢諭吉著「西洋衣食住」の「食の部」であるが、彼は次の通り洋食の方を紹介している。

西洋衣食住（食の部）—全文—

西洋人は箸を用いず、肉類その他の品々大切に切りて平皿（ひらさら）に盛り鉢々の前に並べたるを、右の手に庖丁（ほうちょう）を以てこれを

小さく切り、左の手の肉削（にくさし）に突掛（つつか）けて食するなり庖丁の先に物を載せて直に口へ入るは、甚だ不行儀（ふぎようぎ）のこととせり。汁ものも矢張皿に入れ、匙（さじ）にて吸うなり。汁ものその他、茶を飲むにも口に音をさすることも不行儀とす。この図（下方に食事台（テーブル）の図を載せる）は一人前の皿、茶碗（ちやわん）等を並べたるところなり。大勢会食（おおぜいかいしょく）するときは一つ食事台へ二十人も三十人も席を列（つら）ぬることあり。食事諸道具の名は次に記せり」とて平皿（レブー）水呑（トムブラン）匙（テーブルスブルン）肉刺（ファオルク）庖丁（ナイフ）花活（ウエーリス）（食事台の上に置く）乳汁入（ミルキホット）砂糖入（シュガルベースン）砂糖挿（トンクス）薬味入（カストルス）（醤油、酢油、芥子（からし）胡椒（こしょう）など説いて、それぞれの図を示し、次いで洋酒について

平常の食事には赤葡萄酒（ワイン）又は「シェリィ」酒、其外「ポルトワイン」等を用ゆるなれども、式日または客を饗應するときなどには「シャンパン」その他種々の美酒を用ゆ。甘き酒（リキウール）又は「ブランディ」などという酒は、食後に小さき「コップ」にて島渡一杯用ゆるものなり。又「ビイール」という酒あり。これは麦酒にて其味至つて苦けれども胸隔を開く為に妙なり。亦、人々の性分によりその苦味を賞讃して飲む人も多し。「ウイスキー」「ブランディ」など云える酒は至つて強くして、食事の時に用いはず多くは下人の飲むものなり」と。

さすがは歐米を実見した福沢先生だけあつてなかなか要を得た記述であるが、ここでは西洋料理に不可欠なパンについては言及していない。それほどもかくとして福沢のこの旧著は明治初頭の食物文化政策の波にのつて大いに売れたこというまでもない。

ここで話しを本筋にもどすと、こうしたもろもろの明治初年の百事一新政策の結果、パン食にたいする関心が異常なたかまりをみせるようになつた。その個々の現象には項を改めて詳しく述べるが、石井研堂著「明治事物記源」はこの点に次の通り言及している。

「明治六年（一八七三）十月『新聞雑誌』に、人口に膾灸する食品店を挙げし中に、パンは鉄砲州「つたもと」とあり、同年ごろの『武江年表』には「近ごろ行なわれしもの」を挙げし中に「麵麪種類多し」と出し、また「珍奇競」には「日本出来の菓子パン三年ハヤル」とあり、開化なぞ合せには「パンの弁当とかけて仕立ての着物ととく、心はいつかしのぎだ」とある。

六年四月の撃切図には、パンと南京米の合戦図あり、このもの漸く市中に出でしを知る。七年四月『繁昌記』博覧会の条に「蒸し麦麪（パン）」は野馬（やば）の糞より大なり」とある。そして馬鹿の番付の大関には「米穀を食わずしてパンを好む日本人」を出せり。

都下の流行は忽ち地方にも及び、七年三月頃には名古屋市内にその製造販売を新聞紙上に広告する店舗さえ見るに至れり。愛知週報第九号に同市伝馬町五丁目清甜堂加藤貞七の広告あり。また八年十一月二十八日『読売紙』に四谷御門外尾張町一丁目パン屋藤兵衛の広告せるは、「異人製法メリケンパン、フランスパン、異人菓子品々、日本食パン、乳入ビスケ云々」とあり」と。

またこの著者は、東京市内の最初の西洋料理店に就いて次の通り言及している。

「明治五年版『三幅對（さんぶくつい）』」は、新橋太田金寿楼を挙げしのみ。明治六年十月頃人口に膾灸せる西洋料理店として『新聞雑誌』第百五十六号が挙げしは左記

▽：料理店	采女町西洋軒、築地日新亭、茅場町海陽亭
▽：洋酒	入船町伊勢与、芝神明東花堂
▽：ラムネ	新富町三河屋
▽：鳥類	小田原町東国屋
▽：精牛	通三丁目平庸
▽：牛肉割烹	数寄屋河岸千里軒、黒船町鱈亭、三河町三ツ星、上野釜屋
▽：パン	鉄砲州つた本」と。

これでもつて明治四五年（一八七一～二）頃の文明開化ムードが、パン食や洋食の流行をもたらしたことを察することができるというものであるが、ここで言及している「當世馬鹿の番付表」の全文を示せば次の通りである。

馬鹿の番付表（明治七年刊）

大関	米穀を食わずしてパンを好む日本人
関脇	日本の木を抜いてゴムの木を植える人
小結	商業を捨て会社を結んで身代限（しんだいかぎり）する人
前頭	洋語が出来て我身を修めかねる演説先生
前頭	國産の頭巾（づきん）を捨てシャツボを冠るあわて者
前頭	足の痛いのを辛棒して沓を履く平民
前頭	襦袢（じゆばん）をきらいシャツを着る日本人
これは衣食住の洋風化を國粹的立場から嘲笑したものであるが、その筆頭にパンを好む日本人を挙げているということは、当時の世人がパンを西洋文明の象徴視していたことを示すものとみるべきであろう。	これは衣食住の洋風化を國粹的立場から嘲笑したものであるが、その筆頭にパンを好む日本人を挙げているということは、当時の世人がパンを西洋文明の象徴視していたことを示すものとみるべきであろう。
なお、前記の愛知週報（明治七年三月版）に載つた名古屋市清甜堂加藤定七パン製造所の広告全文は次の通りである。	なお、前記の愛知週報（明治七年三月版）に載つた名古屋市清甜堂加藤定七パン製造所の広告全文は次の通りである。

広告

パン	大形百二十匁	六錢五厘
同	半形六十匁	三錢五厘
同	小形三十五匁	二錢
莫子パン	ハフ	一錢二厘
同	マチ百二十匁	二十錢
ケツキ（葡萄、コメリキ入）	十匁	三錢
同（葡萄、砂糖入）	二錢	

此外洋菓子、華入芥子、橙皮入等お好み次第調進仕るべく候
これでみると当時の食パンは四〇〇瓦があつたことになる。そ

れがいまは四〇〇瓦当り約四十五円であるから、この一世紀間に約六百五十倍に値上りしたことになる。これにたいして当時の菓子パンは一個が一錢二厘であるから、これを現在の一個十五円と比較すると、この方は一千二百五十倍の値上りであるが、しかしその形がいまより遙かに小さかつた。それはともかくとして、こうして文明開化ムードは期せずしてパン食普及の役割を果したのであるが、それはあくまでムード的なものであつて必ずしも地に足のついたものではなかつた。この点は「珍奇鏡（ちんきくらべ）」にパンが登場していることからも察するに難くない。

第八節 鹿鳴館時代の欧化風潮

討幕に成功した薩・長を中心とする維新政府は、慶応四年（一八六八）正月十五日にだした外交一新の布告で、屈辱条約の改訂を公約した。しかし外交というものの成否を決するものは国力である。だから弱体国家がいくらあせつてみたところで、それだけで外交々渉がうまくいくわけのものではない。

この点は維新政府が外交一新を公約してからそれを実現するまでに四年以上の年月を要したことからも察するに難くないが、明治十六年（一八八三）から二十年（一八八七）ころにかけての鹿鳴館時代なるものは、この屈辱条約改訂のために欧化風潮をあふりたてた時期であつた。しかしこの苦心の演出も、結局のところ成果を挙げ得ずして破綻の憂き目をみたのであるが、そうした欧化風潮がパン食の普及に役立つことは予期せざる成果の一つであつた。そこでまづここで維新以後の屈辱条約改訂交渉失敗のあとをふりかえつてみよう。

屈辱条約改訂の歩み年譜

年次別	項目
（明治元年一八六八年）	正月十五日 外国と和親の詔勅（屈辱条約改訂を公約）
十一月十二日 屈辱条約改訂交渉のため岩倉、大久保等の特命全權	

使横浜出帆

（明治六年一八七三年）	五月 大久保・木戸帰國、九月 岩倉帰國（信教の自由すら認めない日本を文明国扱い出来ぬと相手にされず）
（明治七年一八七四年）	二月二十五日 英・仏の横浜駐屯軍撤退
（明治八年一八七五年）	三月三日 大隈参議に条約改正事務審査を命ず
（明治九年一八七六年）	七月二十三日 英条約改正案を拒否
（明治十年一八七八年）	一月二十五日 条約改正予備列国会議開く
（明治十一年一八七八年）	七月七日 外賓接待所落成鹿鳴館と命名
（明治十二年一八七八年）	五月一日 第一回条約改正会議
（明治十三年一八七八年）	八月六日 条約改正のため法律取調所設置
（明治十四年一八七八年）	十一月三日 鹿鳴館で外相招宴の大舞踏会
（明治十五年一八七八年）	七月十八日 条約改正会議二十九回で中止、無期延期となる
（明治十六年一八七八年）	そのため世論沸騰し、九月井上外相辞任
（明治十七年一八七八年）	二月一日 伊藤、大隈妥協成り大隈外相に就任
（明治十八年一八七八年）	十二月新条約大隈案を各国公使に手交
（明治十九年一八七八年）	四月十九日 ロンドン・タイムスに大隈改正案掲載され、世論堀起
（明治二十一年一八七八年）	奴として大沸騰、賛否両論で国内騒然
（明治二十二年一八七八年）	十月十八日 玄洋社員大隈外相要撃
（明治二十三年一八七八年）	十二月十九日 政府態度を一変して対等条約方針に決定
（たびかさ）なる条約改正談判の坐折は、何も岩倉、木戸、大久保、井上、大隈、伊藤などが売国奴だったからではなく、日本の国力が弱体だったからである。そこでこうした日本の弱みを少しでも相手国によくみせかけるために、歐州留学の経験ゆたかな伊藤博文（総理）と井上馨（外相）が中心となつて考えだしたのが欧化風潮の盛り上げという苦肉の策であつた。	これでもつて鹿鳴館時代に終止符が打たれたのであるが、こうした度重

『井上侯伝』によると、彼はこの欧化主義について『世界の現状をみるとき、日本の独立を保つためには「我が帝国及ビ人民ヲ化しテ恰モ歐州邦國ノ如ク、恰モ歐州人民ノ如クナラシムルニ在ルノミ』と、その論拠を語つてゐる。いまでもなくこれが鹿鳴館を生んだ動機であり、鹿鳴館時代なるものを招來した原因であるが、実力を伴わないそんな形だけの欧化政策に、心眼を變らされるほど外国人はお人よしではなかつた。

しかしそれは結果論であつて、当時の政府高官は大まじめでこれを実行し、日本もすつかり文明国になつたということを外人になつとくさせるために骨を折つたのである。そしてこうした上層部のうごきは次第に一般人の間にも波及していつた。欧化風潮が最高潮に達した所以であるが、亡くなつた大山郁夫はこうした明治初期の外交の性格に次の通り言及している。

『明治維新以来の政治家たちは彼等の管理の下（もと）にあるわが国家を、少くともヨーロッパの諸強国と対等の地位に引き上げようとしていたのであるから、彼等にとつては安政年間以来、幕府及びその跡を引受けた新政府と、これらの諸強国との間に屢々締結された諸条約が、我国に不利と不面目とを与えていたことが心外だと考えられた。で彼等は一日も早くそれらから脱却しようと焦つたのである。彼等が西洋文明の攝取に殆ど過当と思われるほどの努力をついやしたことは、この点からでも解釈ができるのである。（略）しかしながら時として彼等はそれから脱線して、当路者及びその家族から率先して、住居や服装や礼式等に於て無恥好に洋風をまねて、遂に名高い鹿鳴館の夜会だの舞踏だのとなつて、そのために国粹保存の反対運動をさえ起させたなどは、あまり愛嬌にもならない滑稽であった。けれどもこういうことはすべてみな条約改正殊に治外法権（ちがいはうけん）若しくは領事裁判権の撤廃に対する彼等の熱心からの輻射作用だと思えば、それに何等の不自然さもなかつたことが考えられる』（大正一〇年解放特大号、明治研究から）と。

この大山論文はよく当事者の苦心を察した論旨で貫かれてゐるが、同じ

雑誌で「明治思想史」を語つてゐる清原貞雄は、この欧化風潮をクソミヅにこぎ下ししてこういつてゐる。

『民権論、自由説も詮じつめれば西洋模倣に外ならぬが、猶お一片の理屈はある。所が一層進んでは理屈も何もない、西洋のものなら何でもかでもよいという盲目的な西洋崇拜と化してしまつた。（略）一も西洋二も西洋、西洋のものでなければ採るに足らず、西洋以外には文明なく、西洋のものといえば長短併せ、これを用ひ、東洋のものは善悪共に捨てて顧みない、この勢（いきおい）は十年代の後半期に最も甚しく、貴重な和漢の古書が一〆又何程の紙屑代で古道具屋の店頭に洒（さら）されたのもこの頃であつた。（略）殊に十五年から条約改正に着手するや、その準備としてまずわが文化の西洋に比肩すべきことを示すといふので、専らその風俗の模倣に努めた。即ち十六年には西洋風の建築鹿鳴館を建て、昼夜舞踏、音楽や骨牌の戯（たわむ）れここに行なわれ、遂に家庭に於ても洋装を用い、礼式もまた洋式に改むるに至り、頭官の邸内では連夜舞踏会があるという有様で、往々貴夫人等に関する醜聞さえ外間に於けるに至つた。就中明治二十年伊藤博文の主宰した仮装会の如きは、當時東日や時事新聞にせられてもてはやされたものである。畢竟他愛もない道化（どうけ）をつくして天晴（あづばれ）西洋人をしてわが文化を認めしめたと信じた当事者の浅慮憐れむべく、しかも風教、道義これがために蔑視したのである。或いは勝海舟、末広重恭の如き一、二の識者にその弊を力説した人もあつたが、一般民衆は斯様な自覚もなく、或いは固有の家屋を毀つて粗末なベンキ塗の西洋造とし、優美な日本画を排して粗製の銅版画を掲げて得々たるものもある。演劇改良会、講談歌舞の矯風会、小説改良、音楽改良、唱歌改良、美術改良等、改良そのものは悪いとはいはぬが、ひとつとして自覚により相当の根拠があつて改良の必要を認めたものはなくして改良とは即ち西洋模倣の意味であつたのである。

或いは頭髪に焼鏡をあててこれをぢぢらして、西洋人に似たと誇る痴漢眼球を青く染むることのできぬのを怨む阿房がある。故なく国籍を脱して

英國に帰化することを願い出づるものもあり、日本語を排して英語を用うべしと力説した非常識漢もあつた。甚しきは人種改良論を唱えて西洋人の種を入れよというものもあるといふ有様であつた。かくの如き有様であつたから耶蘇教の如きも旭日昇天の勢を示して、信者及び教会の如きこの十七、八年の頃においては既に津々浦々に行きわたるということになつた』と。

こうした見方が、明治二十二年（一八八九）の條約改正失敗と共に右翼国粹運動の抬頭を促す原因となつたのであるが、しかしこのような欧化風潮がパン食の普及に大きなプラスとなつたことはいうまでもない。

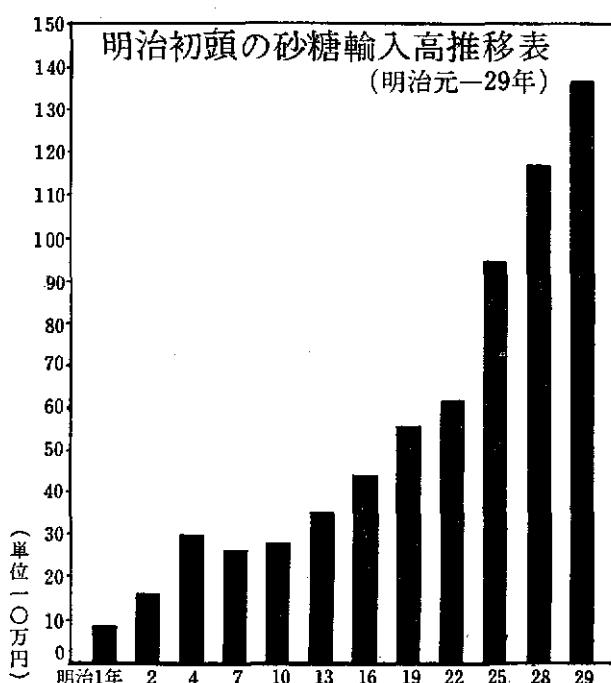
では明治維新からこの鹿鳴館時代までの粉食の成長工合はどのようなものであつたか。項を改めてこの点に言及しよう。

第九節 高度成長する粉食

明治、大正、昭和の百年を通じていえることは、粒食の退潮と粉食の抬頭成長である。それではそうした傾向が、明治初頭にはどのような形で現れていたかであるが、何しろ当時は統計が不備だった為に、こまかいことを知る方法がない。しかし一応その大勢をつかむために数字をひろつてみると、あらまし次の通りである。

(1) 明治初頭の内地米需給調（朝日年鑑）

年次別	内地生産高	輸入高	輸出高	消費高 一人当たり (深川市場)
明治一年	七六五四三二	二、一五八	六四八	八
二、	一六八	一六八	一六八	一六八
三、	八六〇	八六〇	八六〇	八六〇
四、	六三〇	六三〇	六三〇	六三〇
五、	○七〇六	○七〇六	○七〇六	○七〇六
六、	七四三五九九五	七四三五九九五	七四三五九九五	七四三五九九五
七、	二八〇八八三二〇二	二八〇八八三二〇二	二八〇八八三二〇二	二八〇八八三二〇二

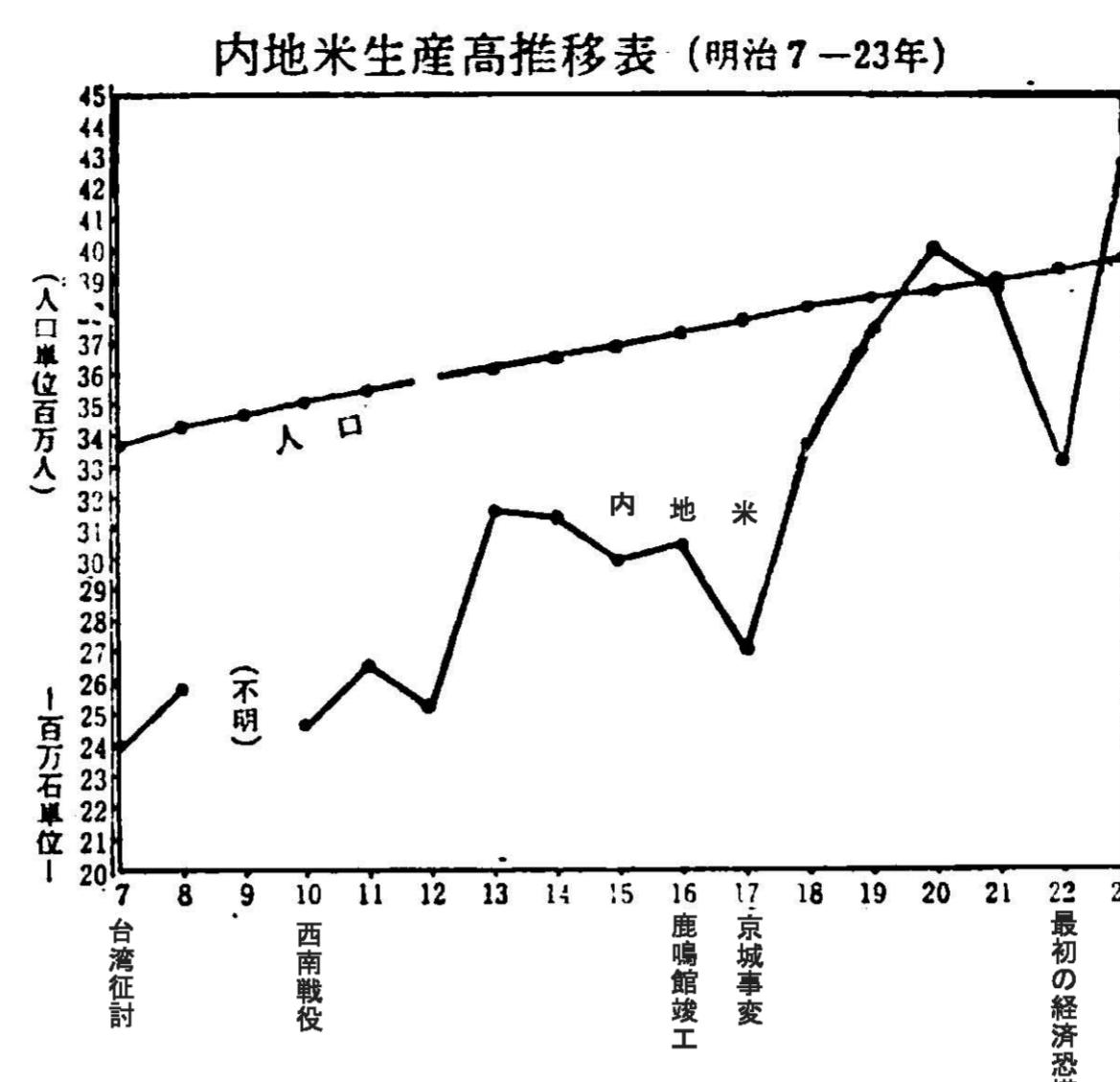


一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百

年次別	内地生産高	輸入高	輸出高	差引消費高
明治一年	千袋	千袋	千袋	千袋
四三二	一	一	一	一
" " "	明治			
五〇七一七九	一千三袋	一千三袋	一千三袋	一千三袋
五、五五三	六、一六四	四、二四四	五、一五一	五、一五一

(口) 口明治初頭の小麦粉需給調 (朝日年鑑)

いることからも容易に察することが出来る。



生産は豊凶による波はあるものの大体において増加の傾向をたどつている。そしてその消費の一人当たりをみて、明治初頭には一人当たり年間七斗代だつた消費が、十五年後には約一石の線にせまつて、いる。この主なる原因が稗、粟などの雑穀や大麦などの消費減退にあることは、次表の通り小麦の消費が増加して

これでみると、米の

一	八	二	一	四	八	七	四
一〇四	六二五	一八七	一、	三六五	五五八		
○·八七一	九三九	九九五	一、	九五三			
八、	六	四、	五	五	五		
九四	○○	九三	○○	六〇			

いことになる。

仮りに明治十一年から二十年までを二期に分つて、その前期と後期の消費高を比較すると、米の消費増九%にたいして粉食の増加率は三三%である。大雑把にいつてこれは三対一の割合であるが、このように粉食が高度成長を遂げたのは、都市においてスキトンやメン類が伸びた為であつて、パンが伸びたからではない。パンが主食として多少なりとも米の補完食としての役割を果すようになつたのは、明治二十二年の不作以後のことだからである。

これによると明治元年の年産四〇〇万袋が明治九年には八〇〇万袋台を突破し、明治十七年には一、〇〇〇万袋台を一時的ながら突破している。随つてこれを米食の増加率とくらべてみると、粉食の増加率が圧倒的に高

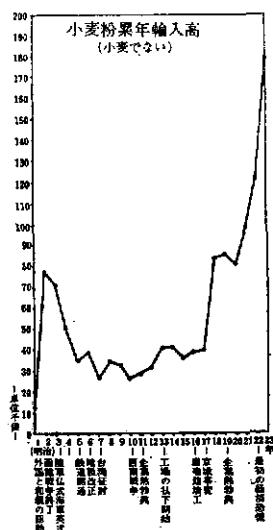
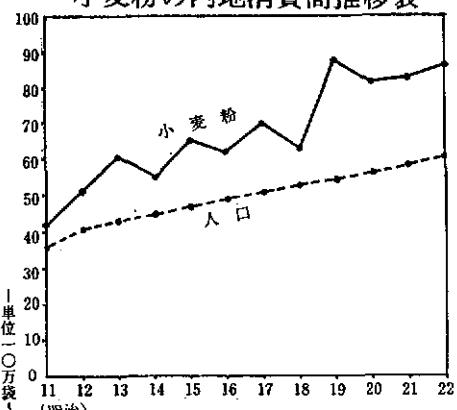
六八八八六七六六五六四
六〇五二一八三〇二八五〇三五〇五一四一三二六二八五
一七二九三九一八六四〇九三六一三四三二三九二七三三四六二五
三四〇六〇三一〇三十一五六一五丨丨丨

明治初頭の米価の推移は別表グラフ記載の通りであるが、これをみると米価が不作のために平均線を上回った時期は四回あつた。第一回目は明治二十三年、第二回目は同七一八年、第三回目は同十二一十五年、第四回目は明治二十二年の端境期から二三、二四年にかけてであつた。ところが前三回の米価昂騰期にパンが米の代替食として役立つたという記録は見当らない。これは当時のパンがまだ珍奇食の域を出なかつたことを示すものであるが、第四回目の値上がり期になると、大都市ではパンが米の代替食としてよく売れたという新聞記事がある。

これはパンが主食または代替食としての役割を果すまでに、相当の時間がかかつたことを意味するものである。それはともかくとして、明治初頭のパンの生産傾向は一体どのようなものだつたのだわうか。

もとより数字的にこれを立証することは、全然できない相談であるが、大体の傾向はメリケン粉の輸入高と洋菓子の輸入高によつてほぼ察することができる。

小麦粉の内地消費高推移表



そこでまず前表掲示のメリケン粉の累年輸入高を、グラフにしてみると、直してみると次の通りであつて、明治十七年以降が多いことがわかる。

前者は当時の凶作と内戦による軍需の増加を示すものであるが、後者はいわゆる鹿鳴館時代の最盛期であつて、食生活洋風化の時代風潮を反映したものとみるべきであろう。しかし輸入粉の全部がパン用に充てられたわけでないことは勿論である。

次は輸入菓子の推移であるが、大蔵省しらべによつてこれを示せば次表の通りである。

(A)

明治初頭の洋菓子輸入高調（大蔵省）

		年次別	金額		
				明治二年	明治二十六年
		年次別	金額		
		金	額		
十四	十五	十九	八	一、一〇二	三六七円
十三	十四	八	九九九	九九九	九九九円
十二	十三	七	九六五	九六五	九六五円
十一	十二	六	二、四四三	二、四四三	二、四四三円
十	十一	五	八七九	八七九	八七九円
九	十	四	八三八	八三八	八三八円
八	九	三	四七二	四七二	四七二円
七	八	二	〇五三	〇五三	〇五三円
六	七	一	四四一	四四一	四四一円
五	六	一	三九二	三九二	三九二円
四	五	一	三九一	三九一	三九一円
三	四	一	二九四	二九四	二九四円
二	三	一	一九〇	一九〇	一九〇円
一	二	一	一七七	一七七	一七七円
		一	一五五	一五五	一五五円

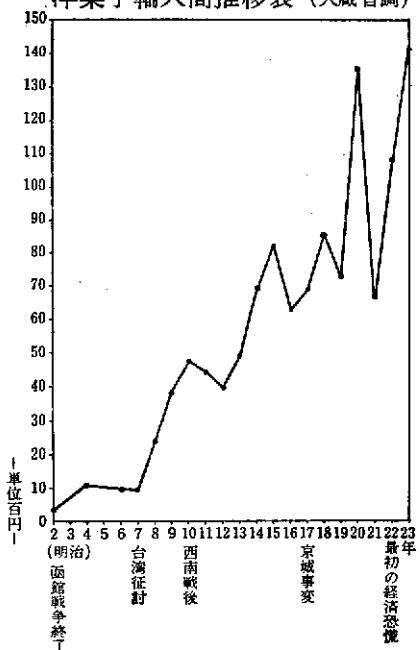
以上の通りであつて、これをグラフにしたもののが別表であるが、これはある意味で食生活洋風化の進行状態を示す指標とみるとできよう。これによると洋菓子の輸入が急上昇し始めたのは、明治七年以降である。

明治初頭の食糧需給動向資料

年次別	人口 (10万人位)	輸入粉 (ビクル)	輸入糖 (ビクル)	東京の 乳牛 (頭数)	全国の 乳牛 (頭数)	乳製品		生パン(東京)			米価 (石当)
						バター	チーズ	ミルク	問屋	仲買	
明治 1年		5,048	227			千円 1	千円 3	千円 46			円 5.98
2			305								9.02
3											9.20
4		18,756	630								5.63
5	348										3.88
6	349										4.80
7	351	9,757	563								7.28
8	353										7.28
9	355										5.01
10	358	10,153	541								5.55
11	361										6.48
12	364			212							8.01
13	366	15,259	681								10.84
14	369										11.20
15	372				502	2,364	24	5	39		8.93
16	375	14,524	836								6.26
17	379										5.14
18	383				870						6.53
19	385	32,262	1,074								5.60
20	387										5.00
21	390				1,799						4.93
22	354	45,525	1,210		9,719						6.00

(註) 生パン関係は東京都編「東京都統計資料」による

洋菓子輸入高推移表 (大蔵省調)

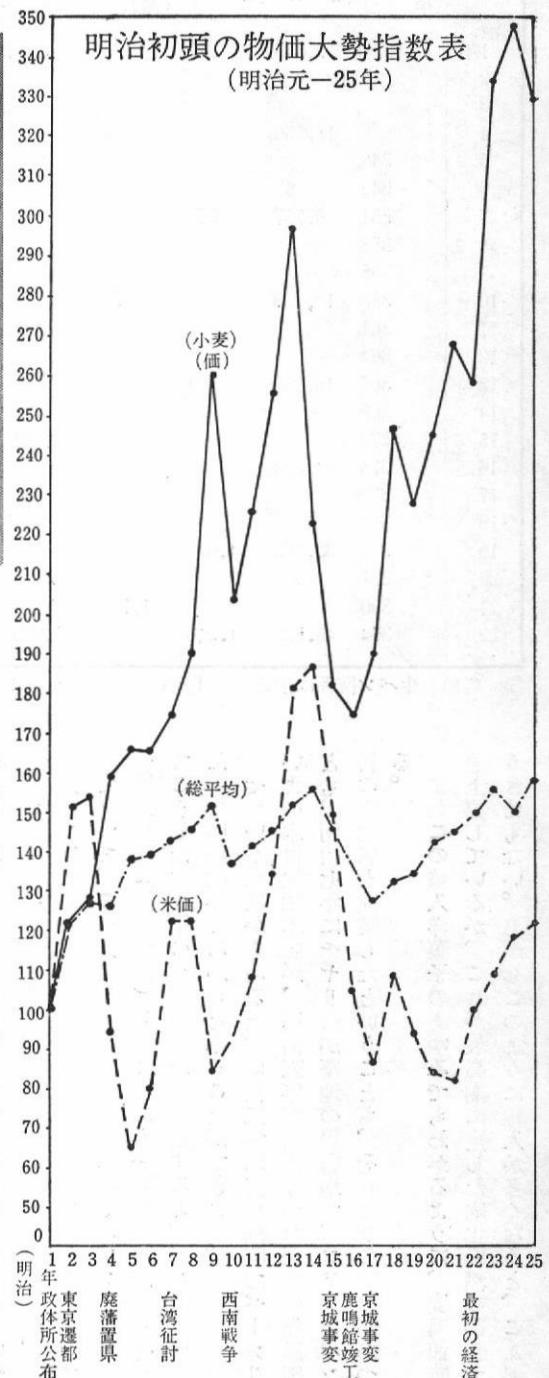


るが、食生活洋風化の大きな支障であつた肉食の禁がとかれたのが、明治五年であることから推測すると、その影響が明治七年ごろから現われたものとみてよいのではないか。元来洋菓子はバタクさいといつて敬遠されたものである。それが明治七年から上昇し始めたことは、そのころから文明開化の影響が食生活面にある程度侵透してきたことを示すものとみるべきであつて、この点は明治七年に横浜にはじめてフランス人経営の西洋菓子屋が出現（運輸省調）したことにも一脈の関連がありそうである。そこでこうした洋菓子の歩みの跡から推定すると、パンの需要が上昇し始めたのも明治七年ごろからとみることができよう。

そういう角度からみると、明治二年に芝日蔭町でベーカリーを開店したいまの木村屋総本店が、明治五年春新装なつた銀座の洋風街に進出したことも、明治七年にチャリ舎が築地の居留地で、フランスパンと洋式清涼飲料の専門店を開業したということも、それなりの理由があつたことにない。

またこの輸入洋菓子のあゆみでもわかるように、鹿鳴館時代に輸入高が急上昇しているが、これが最高潮に達した欧風風潮の影響であることはいうまでもない。しかしこのように輸入が多くなると、こんどは国内に洋菓子

明治初頭の物価大勢指数表
(明治元—25年)



【文面】パン・ビスケット・ボットル（バター）の新聞廣告第一号（慶應三
年三月發行万国新聞—横浜—所載）
パン・ビスケット・ボットル 右の品物私店に御座候間多少
に寄らず御求被成下度奉願候 元町一丁目 中川屋嘉兵衛

洋菓子がのびる時期にはパンものびる。従つてこの鹿鳴館時代はパン業界にとつても大きな転換期であつた。しかしこの点にはあとで詳しく言及することになるので、ここではこれ以上深入りをしないでおおく。
ここでもう少し数字に言及するが、その一つは米と小麦と一般物価の関係についてである。この点を指數によつて表現したのが、別表『明治初頭の物価大勢表』であるが、これでみると米価は凶作期をのぞいておむね平均物価を下廻つてゐるのに、小麦の価格は大きく一般物価の値上り幅を上廻つてゐるということを示すものである。なお、明治・大正時代は砂糖の消費がその国の文明の尺度をはかる資料とされていたものであるが、別表

「明治初頭の砂糖輸入高推移表」をみると、明治十年の西南戦役を境としてその輸入高は激増に転じていて、これは当時の欧化風潮が単なるムードだけでなかつたことを物語る一つの証拠である。

以上は明治初頭から二十二年（一八八九）の憲法発布ごろまでのパン食文化の足あとについての概観であるが、一般的記述はこの程度にして更に具体的に史実を掘り下げることにしたい。

第一章 パンの珍奇食時代

第一節 明治初頭の文化的特質

開国百年記念文化事業会編の「明治文化史」は、明治文化の特質を要約してこういつている。

『明治四十五年間の文化は、その年月の短いのに係らず、その光彩陸離たる、實に世界無比の進歩を遂げたものといつてよいであろう。しかもその文化は單に前の時代の文化を繼承して徐々にこれを發達せしめたというのではなく、殆んど土台から組み直して建設したものというも過言でないものであつた。前の時代の文化は凡てが海外よりする文化にたいして受身的立場において、これを接受し徐々に同化して發達したのであるが、この明治の文化は能動的に發達したものであつたがために、独自性を多分に有して、恐嘆すべき活氣あるものとなつたのである。いわば創造にも等しきものといつてよいであろう。即ち意識的積極的に歐米の文化をとりいれて一面模倣性を多分に發揮しながら、しかも他面日本本来の国民的文化の本質を決して失うことがなかつたのである。かくの如き文化の攝取、同化の様相は、歴史上においても極めて稀有の実例といわなければならぬ。』しかしこの文化史の筆者も、こうした公式的な見方だけではいささか気がさすとみえて『もとより明治文化はかかる輝かしい部面を有すると共に見方によつてはまた暗い部面の伴うことを否定することはできないと考え

られる』とことわつてゐるが、それでは外国人は維新以来の明治文化をどのように評価しているのだろうか。

眼をこの点に轉すると、見る人によつてその見方が大きくちがつてゐる。たとえば中国の梁啓超は、明治日本のかがやかしい成果は、日本人が積極的に西洋の文化を自己のものとしたことにあり、それは速かに外人依存を脱却したことによりみられるとして、次の通り言及している。

『きくところによると日本變法（へんぽう）のはじめには客卿（きやくきよう）は中国よりも多かつた。十年たつてから年を以て裁減（さいげん）し、今日では一切これを省き、役所はすべて日本人がその事に當つている。ヨーロッパ人は百人に一人も残つていないのである。今日中国では變法を口にして數十年を経てゐるのに、なお材を異地に借りてゐる。西人が中国のことに任じても、果してその國と中國との何れを愛するであろうか』と。

しかしあ多くの中国人は、日本が漢学を排して洋学に没頭したことを嫌悪して、西洋の文化はすべてそのみなもとを中国に發しているのに、日本人がこれを忘れて西學を慕うのは、身の程知らずの愚かな行為だと唾棄（だき）していた。

明治三十六年（一九〇三）に大阪で開かれた第五回国勧業博覽会を見た一中国人は、印刷、製紙、採鉱、冶金などの機械の精密なおどろくと共に『これらの陳列されている機械は何れも歐州にならつて造られたもので、日本人の発明にかかるものは一つもない。日本はまことに盜窃（とうせつ）の雄である』とその感想をもらしている。

問題はこのような相異なる見方のどれが正しいかでなく、何れの見方にもうなづける点があるということである。したがつてこれを換言すると、明治の文明開化といふものは、このように複雑にして多岐に亘る性格のものだつたということであるが、このことは衣食住の洋風化についてもそのままあてはめることができる。そしてここでの問題は、このような変化が明治初頭からはじまつてゐるということである。そこで明治初期のパン食史